

ウィスコンシン大学留学報告

包括歯科補綴学分野 堀 一 浩

2017年5月より2018年2月まで、アメリカ合衆国のウィスコンシン大学マディソン校へ留学する機会を頂きました。場所はウィスコンシン州のマディソン市にあり、州都ではありますが小さな大学町です（「マディソン郡の橋」という映画がありました、別のところ）。アメリカの中北部にあり、シカゴから300kmぐらい北に位置しています。とても落ち着いた治安のよい街でみんなフレンドリーでしたし、-20℃になってしまう冬の寒さを別にすればとても過ごしやすいところでした（といっても新潟の80年ぶり？という大雪の写真を見せたらみんなにクレージーだって言われたのですが）。

妻と小学生の子供2人とともに大学のアパートメントに滞在していました。1000戸を超えるアパートメントがあり、大学のスタッフの他、各国からの研究者、留学生も住んでいました。小学校も近くにあり、様々な国から親とともにやってきた子供たちが通っている学校で、ESLも充実していました。子供たちにとっては私とともに突然アメリカに連れてこられ、いい迷惑だったかもわかりませんが様々な文化を知ること、個性を大事にするアメリカの雰囲気に触れることはとても良い経験だったと思います。教育システムが小学校のうちから日本とはずいぶん異なっており、ディスカッションやプレゼンテーションなどの表現能力をどんどんトレーニングしたり、生徒一人一人にPCを貸し出して学習や提出物、評価においてもコンピューター上で行っているところには驚きました。

日本人はあまり多く在住しているわけではありませんでしたが、それでも日本の大学や企業から

来られた研究者が何人かおられ、家族ぐるみで仲良くさせていただきました。夏場に庭でバーベキュー（夏が短い分、夏場をできるだけ楽しむのがアメリカ流でした）で大きな肉をほおぼったり、ハロウィンで農場へパンプキンを取りに行ったり、自分たちで切ってきた生ツリーをデコレーションするクリスマスなど、いくつもの楽しい思い出ができました。40万キロも走った中古のトヨタの車を購入したので、休みの日には近隣の都市へドライブに出かけました。どこまでもトウモロコシ畑と牧場が広がっていて、アメリカの広大さを体感できました。夏休みには家族でセントルイスまで行って皆既日食をみたり、冬場にはカチコチに凍った湖の上でこたま転んだりしたことは良い思い出です（だってねえ、捕まるところはないし、湖の氷って意外と凸凹してるんですよ...）。

ウィスコンシン大学には歯学部はなく、私の留学していたのは医学部の耳鼻科の研究室でした。お世話になったティモシー・マッカロー教授は、ハイレゾリューションマノメトリーを用いた嚥下時の咽頭圧解析に関する研究を長年行っておられます。私は、以前より咀嚼嚥下時における口腔内での舌圧に関する研究を行っており、咀嚼嚥下時における口腔から咽頭への機能的な圧伝搬に興味を持っておりました。口腔内と咽頭内と、部位は違うけれども同じように独自の装置を用いて機能時の圧分布の測定を行っているマッカロー教授の研究には以前より興味を持っており、今回留学したいと打診したところこころよく引き受けていただきました。私は我々の舌圧研究で用いているセンサシートシステムを持ち込んで、ハイレゾリューションマノメトリーとの同期計測を行いました。我々の装置は独自のものであり、IRBの審

査など実験開始までに少し時間はかかりましたが、ラボのメンバーの協力のもと、口腔から咽頭までの一連の嚥下過程を理解するための興味深いデータを集めることができました。ラボ自体はあまり大きくありませんが、非常にアットホームな雰囲気があり、こころよく私を迎え入れてくれてありがたかったです。メンバーはみんなアクティビティが高く、摂食嚥下リハビリテーションの分野では世界的にも進んだ研究を行っていました。

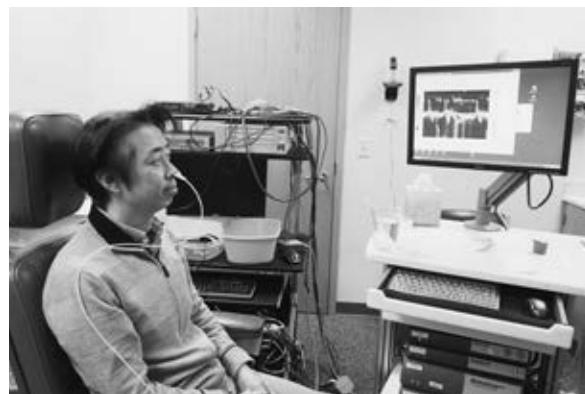
また、摂食嚥下障害に対する研究を行っているラボが他にもいくつかありました。訪問前から何人か知っている研究者もおられましたが、大学自体が大きく、行ってみてから知り合った先生もたくさんいて、そういったメンバーの研究をみせて

もらいながら、ディスカッションを行うことはとても貴重な体験でした。

9か月間という短い滞在期間でしたが、非常に良い体験をさせていただきました。私はなかなか長期留学の機会に恵まれなかったのですがあきらめずにチャンスをうかがっていてよかったと思っています。ぜひ、若い研究者にもこういった機会をつかんでもらって海外での研究生活を経験してもらいたいと思います。最後になりましたが、私に貴重な機会を与えていただいた当分野小野高裕教授、摂食嚥下リハビリテーション学分野井上誠教授、こころよく送り出してくれた当科医局のスタッフに感謝いたします。



Timothy McCulloch教授（右端）とラボのメンバー



実験中の筆者



ウィスコンシン大学マディソン校の大学病院

留学報告

生体歯科補綴分野 加 来 賢

昨年2017年6月から2018年3月までの10ヶ月間、米国テキサス州にあるThe University of Texas Health Science Center at Houston, McGovern Medical School, Department of Pediatricsの小松研究室に留学の機会をいただきましたので御報告致します。

今回の留学は、2015年に新設された日本学術振興会の科学研究費助成事業、国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）の助成を受けたものです。この基金はすでに科研費に採択されている36歳から45歳までの若手(?)研究者が、現在実施している研究計画について国際共同研究による発展を目的として交付されるもので、幸運にも初年度に採択していただくことが出来ました。新潟に赴任する前にも5年間ほど米国のThe University of North Carolina at Chapel Hillでポスドクをしていましたので、今回は2度目の留学になります。大学院を卒業したばかりで何もわからず渡米した最初の留学とは違い、今回はスムーズに留学生活をスタートさせることが出来ました。受入先も以前から懇意にさせていただいている先生の研究室でしたので、有り難いことに研究環境も早々に整えていただくことが出来ました。

今回の留学先である小松研究室は、マウスジェネティックスの技法を使って、主に頭部神経堤に由来する幹細胞群の機能解析を得意としています。小松先生は、先の留学中にお互いポスドクとして知り合った縁で、これまでも幾つかの研究プロジェクトでお世話になっていましたが、2011年に独立され、今ではご自身の研究室を主宰されています。小松研究室のプロジェクトの一つは、我々歯科医師が対象とする顎顔面領域の先天性疾患を再現することが可能な動物モデルを使い、その分子的な病因を明らかにしようとするものです。今回の留学期間中にも自分のプロジェクトの準備を進める傍ら、頭蓋癒合不全症や唇顎口蓋裂、顎関節の形成不全を呈するマウスモデルの解析についても携わる機会をいただきました。自分

で実験をできる時間は非常に貴重で、とても有意義な時間を過ごすことが出来ました。その反面、如何にして説得力のあるデータを出すかについては、改めてその厳しさを教えられました。実験に失敗はつきもので、これまでに私自身もたくさんの失敗をしてきました。成功は多くの失敗の上に成り立つことは言うまでもありませんが、ただ失敗を積み重ねればよいわけではなく、失敗にも仕方があるということを、今更ではありますが、改めて痛感させられました。そういう意味では、今回の留学中は良い失敗をたくさん出来たのではないかと思います。

研究室のあるThe University of Texas Health Science Center at Houstonは世界最大級の医療研究機関が集積するTexas Medical Centerの中核を成しており、周囲には約50もの研究機関が林立しています。したがって共同研究や学外施設の相互利用も極めて盛んであり、著名な研究者のセミナーがいたるところで頻繁に開催されています。研究の遂行だけでなく、人的交流においても非常に恵まれた環境です。またTexas Medical Centerは研究機関だけではなく、多くの専門病院を有することから、全米から多くの患者が集まっています。長期間を有する治療の場合、近くのホテルに滞在しながら通院する患者も多く、バスやトラムでは点滴をしながら乗ってくる乗客をよく見かけました。通勤時や昼食時には、施設外でもスクラブや白衣を着た医療関係者をよく見かけましたが、感染管理的には問題ないのでしょうか。。。Texas Medical Centerの周辺は研究機関と病院で成り立っている地域でしたので、感覚が麻痺してしまっているのかもしれません。

新潟に赴任する前にも留学していたこともあり、留学ってどうですか？留学したほうが良いですか？と聞かれることがよくあります。留学の目的として優れた研究機関で優秀な研究者に囲まれて研究を行う環境を手に入れる、ということ言うまでもありませんが、それだけであれば日本国内でも多くの優れた研究機関があります。実際に最近では海外留学する日本人が極端に減少しているという話もよく聞きます。しかし私が感じた留

学の意義の一つは、“自分がこれまで生活してきた大きな枠組みから一度外れてみる”ことなのではないかと思っています。例えばある休日、朝起きて、電車に乗って外出して、本屋に行って、コンビニに行って帰ってきたとします。日本ならそれほど難しいことはありません。しかし一旦海外に行くと、バスの乗り方がわからない、コンビニで買い物の仕方がわからない、誰かに聞こうにも言葉がわからない。そして途方に暮れます。。。これは言葉だけの問題でしょうか。日本でも、電車に乗って、本屋に行って、コンビニに行っても、場合によっては誰ともしゃべらないかもしれません。しかし、きっぷの買い方もわかるし、コンビニではポイントカード持っていますかと絶対聞かれるので最初から準備しています。つまり、海外で戸惑うのは言葉がわからないからというよりも、その国で通用しているシステムがわからないからなのだと思います。もちろん語学が堪能であれば人に聞いて解決することは出来ますが、最初は戸惑います。実際に今回の留学中も思いもしないことや、自分が当然と思っていたことが当然ではなかったりすることに数多く遭遇しました。車を買に行ったらサインするだけで当日乗って帰

ることが出来たり、レジに並んでいると前後の人達が支払い前のジュースを普通に飲んでいたり、電車に乗るのに改札はないけど無賃乗車が見つかったときの罰金が法外に高かったり。なるほど合理的だと思うこともありますが、なんで???と思うことも少なくありません。そのような想定外のことに数多く遭遇すると、そもそもの想定する範囲が自然と広がるような気がしています。そのために留学に行くわけではありませんが、そのような経験が人格形成に大きな影響を与えることは間違いないと思います。もちろんこれだけで留学したほうが良いと結論付けるつもりもありませんが、留学にはそのような副次的効果もあるのではないかと思っています。そしてそんなどちらかというとトラブルの多い環境を楽しめるのであれば、留学には向いていると思います。保証はしませんが、きっと良い経験が出来ると思います。

最後になりますが、長期の留学をサポートしていただいた魚島勝美教授、多くの業務を肩代わりしていただいた生体歯科補綴学分野医局員の皆様、また留学中にお世話になりました小松義広先生と小松研究室の皆様に深く感謝致します。



研究室のあるMcGovern Medical School



Texas Medical Center

SSSV報告

Bom dia. Japão.

歯学科6年 金子 和 幸

2018年2月17日10:50AM NH174便に搭乗して私たちのSSSV (Short Stay Short Visit) は始まりました。

私たちはどこへ向かったかと申しますとブラジルはピアウイ州テレジーナというところへ同じく歯学科6年の飯島翼、清水優太とともに行って参りました。

2018年2月といえば、日本（新潟）では日々豪雪と格闘していた毎日でしたが、景色は一変し夏真っ盛りで日中には40℃にも達する場所でした。

はじめに現地大学でどのようなことを行なっていたかを簡単に説明いたします。

到着早々に夕食会場に招待され、私たちが訪れたユニノヴァファピ（ノヴァファピ大学）の学部長や教授陣らと共に時間を過ごしました。

そこで前田学部長からアグレッシブに楽しんできるように、三人で日本語を話すよりも英語でブラジル人とコミュニケーションをとるようにと、ありがたい激励をいただいたのを鮮明に記憶しています。

翌日から留学プログラムがスタートし、オリエンテーション（地元テレビ局の取材付き）を経て学生が行う臨床実習を見学、一部実施致しました。

現地で学生が行なっている歯科治療は日本と比較してと大きな差異はないものの学生の診療介入度はブラジルの学生の方が深い印象を受けました。

実際に見学した診療内容は補綴、歯内、口腔外科、矯正、歯周、小児が主体で、滞在期間中にそれぞれ2度見学することができました。一週目は主に見学主体で、二週目から基礎的な治療をやらせていただきました。

私たちが実施したのは、PMTC、手用スクレーピング、抜歯後縫合などでした。

次にブラジルでの休日の過ごし方、大学が終わってからの過ごし方について触れていこうと思います。

休日（土日）は現地学生とともに昼食（シュハスコ）を食べ、ショッピングモールに行き、夕ご飯にピザやシュハスコを食べるという生活をしていました。

出発前はお腹を下すことを心配していましたが、実際は便秘で三人ともかなり苦しんだのも良い思い出です。

初日に頂いた前田学部長からのアドバイスも実践したことが功を奏したのか、かなり多くの友人ができました。

さらにコミュニケーションをとることで判明したことがあります。現地学生は意外と英語が話せない。HelloやGoodなども通じない学生がいたのは驚愕しましたが…結局Google翻訳にあやかり、言語が通じない環境でも身振り、手振りでうにか意思疎通できた時の喜びは大きく、言語というツールを用いなくても人と人は繋がっていきけるということを身を以て体験した非常に有意義なSVであったのではないかと振り返ります。

また、このような貴重な経験を与えてくださった、新潟大学の先生方、渡航前にお世話になった石田先生、ブラジルまでの遠い道のりを引率して頂いた前田学部長、ブラジルでお世話になったDr.Fabricio, Dr.Thiagoに深く感謝いたします。

最後になりますが、日本からブラジルへのSVやブラジルから日本へのSSが途切れることなく永きに亘り続いていくことを願い、ブラジルSV体験記とさせていただきます。

Obrigado!!



筆者真ん中



現地学生との写真



シュハスコ（有名な部位であるセブ牛のコブ）



チェンマイ大学を訪問して

歯学科5年 小林 由奈

「微笑みの国」という言葉がこれほどぴったりだなんて。タイを訪れた初日からそう実感した。タイの学生は、いや、タイに住んでいる人はみなと言うべきだろうか、非常に親切で、道行く人も目があえば笑顔になってくれた。タイ語を覚えたことが嬉しくて誰にでも挨拶をする私たちに、必ず挨拶を返してくれた。毎日が新しい発見ばかりで、刺激的で、貴重な体験ができた10日間だった。英語力や歯学の知識への不安はあったが、もっと様々な国を見てみたい、自分の可能性を広げたいという気持ちが勝り、昨年度短期留学への参加を希望した。留学を終えた今、このプログラムに参加してよかったと心から思っている。

今回のプログラムでは、大学病院の見学だけでなく幼稚園や施設へ行き、タイと日本の文化を教えあったり、歯科検診や歯磨き指導を行ったりする機会も多かった。治療現場の衛生面が良いとは言えない場面や、自分の歯ブラシを友達の口に入れたり床を磨いてしまったりという子供を目の当たりにしたことは事実だ。両親が共働きといった家庭環境などが原因で、ほぼ全てが残根状態という子供もいた。日本ではあまりみかけないケースがその国の環境、生活、食事などにより表れていることを感じた。もちろん日本もタイを見習うべきという点はあったが、日本の環境の良さや恵まれている国なのだとすることを改めて実感した。

現地の学生は積極性や向上心が強く、歯科について多くを知っているだけでなく日本について多くを知っていたり、知りたがっていたり、日本語を話せる学生もいた。早いうちから臨床実習を行える環境があり、経験が積めるということに自分の置かれている環境との違いを感じた。そのような学生と毎日コミュニケーションをとる中で、自分の無知さを実感するとともに、日本について私は何を知っているのか、まずは自国についてもっと知る必要があるのではないかと痛感した。

三大学合同だったこともあり、国内の学生とも交流ができた。他大学のことを知り、良い刺激を

受けられるのもこのプログラムの醍醐味だと思う。“〇日後までに日本の歌とダンスを覚えて披露してね！”と言われた時にはさすがに驚いたが、現地で練習したかいがあり、タイの方々と一緒に踊ったり歌ったりした瞬間は一生忘れない思い出となった。また、タイでお世話になった学生が新潟大学へ短期留学をしに来たため、再会できるという喜びを感じた。もし留学に対し少しでも興味があったり悩んだりしている人はぜひ参加すべきだと強く勧めたい。他国の歯科医療について知るだけでなく、日本のことや自分自身を見つめ直すきっかけになるはずだ。

最後に、このプログラムへ参加させてくださった先生方、両親、そして一緒に学んだ仲間、タイで出会った方々に心から感謝している。タイでの経験を活かし、広い視野を持った歯科医師になれるよう、これからも勉学に励みたい。



タイの学生と共に



新潟大学の学生と終了証

ベトナム・ハノイ医科大学訪問記

歯学科3年 草 塩 奈 央

今年の3月に、日本学生支援機構（JASSO）による留学生交流支援制度（短期派遣）プログラムの参加学生として、ベトナムのハノイ医科大学へ短期留学をさせていただきました。私は国際交流が充実していることを決め手に新潟大学を受験し、低学年のうちから海外留学に行きたいと考えていました。口腔外科に少し興味があり、ハノイ医科大学では口腔外科の手術を見学できると聞いていたので、ハノイ医科大学に派遣希望を出しました。

ハノイはベトナム北部に位置する首都で、古い寺院やフランス統治時代の建造物が多く残っている、政治と文化の都市であると同時に中国とフランスが融合している都市でした。ハノイ中心部では、オートバイや自動車で混雑しており、接触事故をよく見かけました。

ハノイ医科大学は1961年に設立された国立大学で、歯学部は日本と同じく卒業まで6年間です。歯学部校舎では、4年生以上が技工実習や臨床実習を行っていました。大学の隣にはハノイ医科大学病院があり、歯科としては口腔外科と総合診療科があり、いつも患者さんでいっぱいでした。

滞在中のプログラムとしては、4年生以上の技工実習や臨床実習の見学や、大学病院での口腔外科の手術や総合診療科の見学などをさせていただきました。口腔外科の手術で、私は初めて手術着を着てバキュームなどの手術の介助という貴重な経験もさせていただきました。1つの部屋に性別関係なしに多くの患者さんが入院しておられて、やはり交通事故外傷の患者さんが多く、舌癌や嚢胞、顎関節症の手術患者さんや、一度に4本の親知らずの抜歯をする患者さんもいました。

留学前の私は、ベトナムの交通事故外傷が多いのは、オートバイや自動車の交通量が多いためであると考えていましたが、留学中にほとんどの事故の原因は、アルコール摂取による飲酒運転で、自分自身が怪我をするか、道路に横断中の通行人をひいてしまうことで引き起こしていることがわ

かりました。また、オートバイで、2人乗りは当たり前前で、ヘルメットを着用していない人も見かけました。ヘルメットも日本では考えられないくらい軽くて薄いので、特に顔面の複雑な骨折が目立つのだと思いました。

現地の学生はみんなとても優しく、お昼寝タイムを含めた2時間のお昼休みに、オートバイに乗ってハノイで有名なお店に連れて行ってもらいました。毎日の放課後や休日にホアンキエム湖やナイトマーケットなどハノイの有名な観光スポットも案内してくれました。ベトナム料理はどれも美味しく、麺の種類が豊富で驚きました。

今回の留学では、2年生であり歯科の知識がない状態でしたが、同行して頂いた先輩に多くのことを教わり、歯科の知識を少しでも身につけられたと思います。また、自分の英語力のなさを痛感し、歯学の勉強だけではなく、英語もしっかり勉強したいと思いました。このような貴重な経験をさせて頂き、本当にありがとうございました。



ハノイ医科大学の学生との写真



farewell partyでの写真